

## 和泉式部日記語彙考

— 夜のほどろに —

竹内美千代

和泉式部日記の長保五年九月二十余日の頃の記述は左のようである。テキストは三条西家本を底本とする日本古典文学大系本を用いた。必要な箇所には、右に寛元本、左に応永本を加えておく。

九月廿日あまりばかりの有明の月に御目さまして、いみじう久しうもなりにけるかな、あはれこの月は見らんかし、人やあるらんとおぼせど、れいの童ばかりを御ともにておはしまして、門をたたかせ給ふに、女目をさましてよろづ思ひつづけふしける程なりけり。すべてこのごろは、おりからにや、もの心ほそくつねよりもあはれにおぼえて、ながめてぞありける。あやし、誰ならんと思ひて、まへなる人をおこして問はせんとすれど、とみにもおきず。からうじておこしても、ここかしこのものにあたりさわぐほどに、たたきやみぬ。帰るぬるにやあらん、いぎたなしとおぼされぬるにこそ物おもはぬさまなれ、おなじ心にまだねざりける人かな、誰ならんと思ふ。かろうじておきて、「人もなかりけり。そら耳をこそ聞きおはさうとて、夜のほどろにまだほかさるる、さわがしの殿のおもとたちや」とてまたねぬ。女はねでやがて明かしつ。(四一九ページ)

本稿は「夜のほどろに」について考察したものである。帥宮は有明月の夜、和泉式部の家の門をたたかせ給うた。女は目をさまして思い悩んで臥していた折とて、すぐに侍女を起こして問わせようとしたが、容易に起きない。ねばけてあちらこちら当り感いまごついているうちにたたきやんだ。下男がかろうじて起きて出た頃には、

人影はなかつた。女はそのまゝまんじりともせず夜を明かした。空しく帰つた宮から翌朝御文が届いた。

「人もなかりけり云々」の詞は古典文学大系註（遠藤嘉基博士）は下男のことばとされ、古典全書註（山岸徳平博士）は侍女のことばとされた。和泉式部日記講義（宮田和一郎氏）では「侍の者」とあるのは、男性の下部の意であろうと考える。私は下男説を取る。熟睡中に起こされ、しぶしぶ出て見た時には、既に人影がなかつたので、「そら耳をこそ聞きおはさうじて、夜のほどろに……さわがしの殿のおもとたちや」というところに、下部の男の不平の口吻があらわである。寛元本は「いらだちてねぬ」とある。「聞きおはさうとて」となつてゐるのは、三条西家本だけで、寛元本・応永本共に「おはさうして」となつてゐる。「おはさうじて」とありたいところ。大系本は書き誤りとみて「おはさうじて」とつてゐる。「おはさんとす」の音転で婉曲な表現。

「夜のほどろ」とあるのは三条西家本だけで、寛元本は「よのほどに」、応永本は「夜のほどだに」となつてゐる。「夜のほどに、夜のほどだに」は、夜のまに、夜のまにさえという意で一応は通じるわけである。「夜のほどろ」という語は余り用例の多くないことばであるから、書写の際に合理化が行われて、「ほどに」「ほどだに」とされたのであろうか。「夜のほどろ」がやはり原形ではなからうかと考える。

## 二

和泉式部日記の諸註釈を見よう。和泉式部日記詳解（小室由三・田中榮三郎両氏著）と和泉式部日記講義（宮田和一郎氏著）は、応永本の「ほどだに」を取つてゐるから問題外である。和泉式部日記考註（尾崎知光氏著）は、「ほどろ」は「程」で、「ろ」は接尾語とある。日本古典文学大系の註（遠藤嘉基博士）は、「夜なかに」。古典全書の註（山岸徳平博士）は、「夜ぶんに」となつてゐる。全講和泉式部日記の註（鈴木一雄氏）は、「夜なかに」。「ほどろ」は「ほど（程）」に接尾語「ろ」のついたものとする。

「夜のほどろ」ということばは、万葉集の三例はまず想い起されるが、その他には余り見かけない。王朝の作品で索引のある竹取物語・源氏物語・夜半の寢覚・更科日記・蜻蛉日記・紫式部日記・栄華物語・今昔物語（一

部)等には見えない。古事記・記紀の歌謡・落窪物語・伊勢物語・大和物語・平仲物語・枕草子など、ざつと見た所ではなかつた。国歌大観の索引にも「夜のほども」は万葉集の三例の外は見えない。国語辞典は宇津保物語の蔵開下の一例を挙げてゐる。従つて管見に入つた「夜のほども」は、万葉集に三例、宇津保物語と和泉式部日記とに一例ずつ、都合五例である。しかも宇津保物語にも「ほど」となつてゐる異本があり、和泉式部日記でも「ほども」「ほどもだに」となつてゐる本があり、「夜のほども」が果して平安時代に存在したかも考へて見なければならぬ。

次いで辞書類で「夜のほども」を収めてゐるものを挙げよう。

大辞典(平凡社)

ほども 斑 まだら はだら 用例万葉集 2315  
2323

ほども 程ろ ろは接尾辞。程に同じ。用例 万葉集 754  
1539

古語辞典(中田祝夫博士)

ほども (斑)(名・副) まだら はだら あは雪ふれりほどもほどもに

ほども (程ろ)(名) うち あいだ ほど 夜のほども出でつつ来らく ろは接尾語

国語辞典(上田万年博士)

よのほども 「ろ」は接尾語にて、よのほどと同じ。契沖一説、ほどはほのに通じて夜のほの暗きうち、即ち

曉方。宣長又一説、ほどもははだれ・はなれに通じて、夜の明けはなる頃。古義 万葉四「夜之穂杼呂吾  
が出でくれば」宇津保国護下「夜のほどもに参りて」

古い辞書では、和名抄・名義抄・新撰字鏡・節用集・以呂波字類抄・日葡辞書・日仏辞書・和訓栞・雅言集覽等には全く出ていない。

「夜のほども」の解明は万葉集の用例から出発しなければならぬわけである。左の三例がそれである。

更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌十五首

754 夜之穂杼呂 吾出而来自者 吾妹子之 念有四九四 面影二三湯（巻四）

755 夜之穂杼呂 出都追来良久 遍多数成者吾胸 截焼如 （同）

天皇御製歌二首

1539 秋田乃 穂田乎鷹之鳴 聞尔 夜之穂杼呂尔毛 鳴渡可聞

三例とも夜之穂杼呂と表現され、「杼」は万葉仮名では乙類の浊音であるから、「よのほども」と発音していたと思われる。夜は「ヨ・ヤ・ヨル・ヨラ・ヨヒ・イメ」などよんでいるが「よのほども」と五音に発音していたと思う。万葉集の諸注釈は「夜のほども」をどう解いているであろうか。

万葉集代匠記（契沖全集一卷）

（初稿）夜のほども 管見抄云。ほどもは夜のほからかに明るころなり。もののひかりあかきをほてりというに同じ心なり。今案 夜の程といふに「ろ」の字は助詞にくはれるにや。心は夜をこめてなり。人めをつつむゆへなり。

（精撰）夜之穂杼呂ハ呂ハ助語ニテ夜ノ程ナリ。人メヲツ、ム故、夜ノ程ニ飯ルナリ。

万葉集古義（鹿持雅澄 才二巻）

夜之穂杼呂は夜之分離ハナレなり。穂杼呂と波那礼と通ひて同言なり。集中雪の歌に保杼呂とも波太礼とも通はしよめる。太は那ナと又殊に親しく通へば、保杼呂、波太礼、波奈礼は全う同言なり。（中畧）さて夜之分離とは夜の明なむとする極みを云なり。其は夜のカギリのはなれなればかく云り。雪に云るも分離ハナレ々々に零るを云なり。

又余がはしめ思ひしは穂杼呂は麻陀良と同言にして暁方のまだ明もせず暗きにもあらず、明と暗と打斑りたるほどを夜の斑（マダラ）と云なるべし。きて雪の歌によめるをも斑にふりたるよしと思ひしかど、なほ初の説によるべし。此言古来説々多かれども解得たる人一人もなし。まづ契沖が夜の程といふに、呂の言は助辞にくはゝれるにやと云るはいふに足らず。又本居氏の「ほど」と「ほの」と同言にて、ほのくらしき時なりと云るもわるし。夜のほどろはしか云ひもすべし、雪によめるはいとおぼつかなし。

古註では、古義が集成というべく、最も詳細に説かれ妥当である。古註を整理すると、

(1) 程に接尾語ロのついたもの。（古義は反対している）

(2) ほどろ・はだら・はなれは同義語である。

の二点が説かれていることは注目すべきである。

次に新註の重なるものを挙げよう。

万葉集全釈（鴻巣盛広氏著 才一冊）

穂杼呂は程に助詞ろがついたものと説明せられているが、物の不充分なことをいふ語のやうに思はれる。宣長が歌の解に、「暁方うすく明くる時をいふ。まだほの暗きうちなり」といつたが当てていると思われる。落波

太列可消遺有、沫雪香薄太礼爾零登（1420）庭毛薄太良爾三雪落有（2315）ハダレ、ホドロ、ハダレニ、ハダラニ

などは皆雪の薄きを言つたのでこれと同一系統語であらう。従来ハダレをマバラと同じとし、斑雪と解したのはいよくない。

万葉集註釈（沢瀉久孝博士 巻四）

ヨノホドロ 集中三例あるのみ。すべて夜之穂杼呂の表記。夜の明け方の意と察せられるが、どうしてさういう意味になるかわかりにくい。

仙覚抄 ヨノホトロとはヨノヒカルと云ナリ。

管見 夜ノホカラカニ明ル心也。

代匠記　ロハ助語ニテ夜の程ナリ。

略解　沫雪ノ保杼呂保杼呂零敷者　うすうすと降敷也。  
古義　夜之分離なり。穂杼呂と波那礼と通ひて同言なり。

「程ろ」の説が簡單明瞭なやうであるが森本健吉君がはやく注意したやうに、程の意の保刀のトは甲類、ホドロの杼は乙類であつてあたらない。又三例とも夜の明け方、未明に相等するところに用ゐられてゐて、単に夜の程ではさういふ意味は示されない。「夜の程」というならば他にも用ゐられさうにも思われるが、右三例に限られてゐる点からも、「程ろ」説はとりがたい。「ほどろ」はやはりほのぼのと夜の白みそめることを示すもので、ハダレ、ホドロに關係したものとと思われる。類聚名義抄には、衍　遍　広　敷　播　宣　施　散　班などとして見出され、ホドは一つのもことから広く広め行きわたらす意と解かれる。「ほどろ」は動詞成立以前の擬声語ともいふべきもので、語意としては夜のほのぼのと明けかゝる頃をさしたものと認められる。沢瀉博士の明快な解明に接すると近代の光がさしてトンネルから抜け出した思いがする。万葉集の特殊仮名遣研究がホドロの解明に役立つてゐるわけで、「程ろ」説の取り難いことが明確になつた。沢瀉博士の挙げられた森本健吉氏の論文は、昭和八年九月の雑誌「文学」に発表された「夜之不深刀尔考」であつて、「刀尔」は甲類のトで、保刀尔・間尔（ホドニ）と同じであり、時・等伎・登伎のトは乙類で、「刀尔」は「時ニ」の意ではないと述べられた。沢瀉博士は保刀のトは甲類、穂杼のトは乙類であつて、「穂杼呂」は「程ろ」でないことを指摘された。『万葉集大成 6』所収の「万葉時代の音韻」（大野晋博士）によると、古事記・万葉集では、

甲類　と　刀　斗　・　礪　速  
ど　土　度　渡

と　等　登　澄　得　・　十　鳥　常　迹　跡（止）

乙類　ど　杼　杼　特　藤　騰

とあつて程（保刀）と穂桴（保桴）は別語であると考えなければならぬ。従つて穂桴呂の解釈には「程ろ」説は除かねばならない。古註新註を通じて行われて来た(1)「程に接尾語ロのついたもの」という考えは削除すべきものである。

すると(2)の説、「ホドロはハダラ・ハナレと同系の語である」について考えねばならない。「ホド」という造語成分に、「ロ」という接尾語がついている。接尾語「ろ」は古く万葉集にも、「兎ろ 嶺<sup>ネ</sup>ろ 尾ろ くしろ」と名詞につき、「ともしきろかも つけろ せろ 見ろ」など活用語にもついている。大島正健氏の『国語の語根と其の分類』に、意義なく語調を助ける「ロ」の例として、ウロ ウツロ トコロ クロ(畔) コロ(頃) シロ(代) ウシロを挙げている。現代語の中にもこの他、オボロ ソゾロ 汗ミドロ マイマイツブロ トドロク オドロク等見られる。又命令形に「ロ」のつく形は一般化している。では「穂桴呂」の「ホド」は何なる意味を待つ造語成分であろうか。

## 四

「万葉集中に見える「夜之穂桴呂」は三例であるが、「穂桴呂」及びそれに近いものを拾つて、「ホド」の意味を探つて見よう。

- |      |     |         |      |       |        |      |
|------|-----|---------|------|-------|--------|------|
| 1420 | 沫雪香 | 薄太礼尔零登  | 見左右二 | 流倍散波  | 何物之花其毛 | (卷八) |
| 1639 | 沫雪  | 保桴呂保桴呂尔 | 零敷者  | 平城京師  | 所念可聞   | (卷八) |
| 1709 | 御食向 | 南淵山之    | 巖者   | 落波太列可 | 削遣有    | (卷九) |
| 2132 | 天雲之 | 外雁鳴     | 従聞之  | 薄垂霜零  | 寒此夜者   | (卷十) |

2318 夜乎寒三 朝戸平開 出見者 庭毛薄太良尔 三雪落有 一云 庭裳保杼吕尔雪曾零而有 (卷十)

2323 吾背子乎 且今々々 出見者 沫雪零有 庭毛保杼吕尔 (卷十)

2337 小竹葉尔 薄太礼零覆 消名羽鴨 将忘云有 益所念 (卷十)

4140 吾園之 李花可 庭尔落 波太礼能未 遺在可母 (卷十九)

右の八例をまとめると二つになる。

(1) 薄太礼尔・保杼吕保杼吕尔・薄太良尔・保杼吕尔は同じ意味で、雪の降っている状態を形容する語である。

1420 1639 2318 2323 の歌。(副詞)

(2) 波太列・薄垂・薄太礼・波太礼は、はだれに降る雪のこと。はだれ雪でありはだれ霜にもいう。(名詞)  
 1709 2132 2337 4140 の歌。(1)が本来の意味であり名詞に転じたのが(2)の用法である。

はだれの意味は(1)も(2)も同じで、雪の降る状態を形容する詞である。八例中、七例が雪、一例が霜を形容している。沫雪は泡雪とも書き、消えやすい雪のこと。うち二例は落花の譬喩に用いられている。沢瀉博士が万葉集全釈(巻八28ページ)に述べられているように、「ハダラもホドロも同じで一種の擬態語でハラハラと訳されるのが最も原義に近い」ものと考えられる。hadare hadara hodoro は子音の配列は同じで、後の母音が変化しただけの同一語と見て差支えあるまい。では雪の降る状態のどのような形容であろうか。

イ 落花の流れ散る状態と似た沫雪の降り方。

1420

ロ 雪が現在降っている状態。

1639 2318 2323



ハ 消え残っている雪をいう。 1709 4140

ニ ささの葉に降り覆っている雪。 2337

ホ 霜が降る。 2132

ハラ／＼と降った雪は、一面に積ったのか、深い雪か、薄雪か。この用例からは、白い雪片がハラ／＼と降っている状態が目に見え浮ぶのであるが、はつきり言い切れない。

「はだれ」は歌ことばとして、万葉以後歌に詠まれて多くの説がみられるのだが、実体ははつきりしない。代匠記（契沖）ハダレはマダラなり。

万葉集考（賀茂真淵）斑にふるなり。  
雅言集覽（石川雅望）ハダレはハダラに同じくマダラの意なり。

俚言集覽（村田了阿）（物類称呼）ホロホロ降る雪を越路にてハダレ雪と云。愚按、此ハダレは斑の意なるべし。

大辞典 斑。雪霜の置きたるさま。また花の散りたるさまにつきていふ語。まだら。はだら。はだれ。大言海 はだらに、はららにの転。マバラニ。ハダラニ。マダラニ。

右のように、「はだらに」の語義の中に、「まだらに」が入り込んで来ている。これが「はだら、はだれ、はだろ」の語義解明を妨げていると思うのである。万葉集の「はだれ」の八例は、「まだらに」の意味をはつきり

示しているものはない。殊に 2132 の薄垂霜はまだらには降らないし、2337 のささの葉に降り覆うのは斑雪ではない。

1639 2318 の歌も斑らの意を持つてはいない。この点につき鴻巣盛広氏の説は傾聴すべきものである。

ハダレ・ハダラ・ホドロを雪の薄く降る状態に解釈しよう。従来ハダレをマダラと同じとし斑雪と解したのは

よくない。薄太礼の「薄」という文字が、ハダレの本質をあらわしている為ではあるまいかと想像せられる。  
 (万葉集全釈 才二冊 一一七五ページ)  
 「薄」を「ハ」の音仮名のみとみず、意字として、「薄く降る」ことを意味していると考察された。

## 五

「はだら・はだれ・ほどろ」から「まだら」の意なしと考えるためにはまだらの用法を見ねばなるまい。万葉集総索引によつて「まだら」を左に掲げる。

- 1255 月草尔 衣曾染流 君之為 綵色衣将摺跡念而 (卷七)
- 1260 不時 斑衣 服欲香 鳴針原 時二不有鞞 (卷七)
- 1296 今造 斑衣服 面影 吾尔所念 未服友 (卷七)
- 2177 春者毛要 夏者緑丹 紅之 綵色尔所見 秋山可聞 (卷十)
- 2193 紫 綵色之藕 花八香尔 今日見人尔 後将恋鴨 (卷十二)
- 3354 伎倍比等乃 万太良夫須麻尔 和多佐波太 伊利奈麻之母乃 伊毛我乎杼許尔 (卷十四)
- 2993 右の歌は色は一定しないが、色のまじつた美しい色にいつていて、雪や霜などの白一色のものが、所まだらに点々とある状態ではない。これらは多く衣服の色あるものにいつている。月草で綵色に染めるのは、青色であり、鳴針原で斑衣を染めるのは、ハリが榛の木であつても、萩であるにしても、茶色とか赤紫色とかであり、
- 2993 は紫のまだらのカヅラであり、  
 2177 は秋山の紅葉のさまざまな色のまじつた美しい色を言つている。

もともと「まだら」は梵語 *mandala* から出たことばで、旧訳では壇・道場・法門とし、新訳では輪円・具足・聚集としている。雑色の義がある。極楽浄土の有様を写した図をいう曼陀羅は、梵語意識を失わず、外国語として国語の中に用いられ、雑色の意のマンダラは、国語化しマダラ、マダラカ、マダラカニ、マダラニ、マダラナリなどと名詞から活用語となつて同化してしまつてゐる。従つて「まだら」は古くから、

- (1) さまざまの色がまじつてゐる。美しくはなやかな色のまじつたもの。  
 (2) ふちあり、斑点がまじつてゐる。

の二義があり、万葉集での用例は(1)の意が強く、倭名抄の「班瓜 和名末太良字利 黄斑文瓜也」は(2)の意を示している。又新撰字鏡には、「躑 万太良尔 雑不同也」とあるのは、(1)の意である。類聚名義抄にはマタラナリ、マタラカと訓んだ漢字はかなりある。その漢字の表わす意味は悉くは分らないが、マダラと訓む字が、美しいもの、鮮やかものを意味しているものが多い。

蔚 マダラカ アキラカニ サカリ ウルフ

睥 マダラカナリ ミル ウルハシ ニギラカナリ

絢 マダラカニ アヤ カイマダラ

藻 ウルハシ マダラカニ

約 マタラナリ ツムム マツハル ヨシ アヤノ文

駁 ツチムマ マダラナリ アキラカ

斑 マダラナリ マダラカ

賦 マダラナリ カハル クバル ユタカナリ ウタフ

すなわち名義抄では(1)と(2)の両義があつたことがあきらかである。枕冊子179段「裳唐衣に白いものうつりてまだらにならむかし」や、同じく能因本34段「馬はむらさきのまだらつきたる」は(2)の意であり、後世は(2)が「まだら」の主な意義となつて今日も生きてゐる。そうして「まだら」を調べた中には、「まだらはハダラ、ハダレな

り」という解は全く見当らなかつた。

とにかく万葉集に見える「マダラ」は「ハダラ」と解することは出来ない。近世の万葉学者の「ハダラはマダラナリ」とする説は何を根拠にしたのであろうか。私は思うのに「はだら はだれ はだれ雪 はだれ霜」ということは、美しい語感を持つているので、響きを大切にしている歌ことばとしては用いられたが、日常語では亡びてしまい、「はだれ」の実体がわからなくなつていたのであろう。そうして「まだら」という発音の似た語と混同され、まだらの意にも用いられたのではないだろうか。中古から中世にかけて「はだれ」はどのように用いられたか見よう。

冬のよの庭もはだれにふるゆきの…… (古今集 一九 雑体 つらゆき、古今 六帖)

春くれば吹く風にさへ桜花庭もはだらに雪は降りつつ (躬恒集 下)

ことしいたうあるゝ事なくてはだら雪ふたたたびばかりぞふりつる (蜻蛉日記下の下)

かるの池の入江をめぐるかも鳥のうは毛はだらにおける朝露 (顯輔集)

風さやぐさよの寢覚の寂しきにはだれ霜ふりたづさはに鳴く (長秋詠藻上 俊成)

山あるにすれる衣や紛ふらむはだれ霜ふる庭の榊葉 (千五百番歌合 顯昭)

寂しさの始とぞ見る朝まだきはだれ霜ふる小野の篠原 (六百番歌合 季経)

朝まだき狩場の小野に雪降ればはだれにならぬ敏鷹ぞなき (実国卿集)

木の間漏る月の影とも見ゆるかなはだらに降れる庭の白雪 (山家集 上)

はだれ雪降るかと思れば九重に散りかさなれる花にぞありける (頼政集)

風寒みはだれ霜ふる秋の夜は山下とよみ鹿ぞなくなる (堀川百首 風雅集 秋上 基俊)

大江山すそわの小田にゐる雁のはだれの霜のあとぞ消えゆく (夫木抄 一二 西園寺入道太政大臣)

虫の音のよわるもしるし浅茅生にけきは寒けくはだれ霜ふる（夫木抄 一四 有家）

はだれ雪あだにもあらできえぬめり世にふることや物うかるらん（夫木抄 一八 主殿）

時雨するはだれの山はもみぢばの色づくほどの色にこそあれ（夫木抄 二〇 俊成）

まださかぬ花かとみえてまき山のはだれに積るふゆの白雪（夫木抄 二九 為家）

風さわぐきよのねぎめのさびしさははだれ霜ふりたづきはになく（万代集 冬 俊成）

雪ははだれに降つたりけり（平家物語 一 殿下乗合ノ事）

はだれ雪間ヲアサルテフ 小鳥狩シテ遊バント（根元曾我 近松）

春ふかきあをねがみねの昔の上にはだれふりしき散る桜かな（樞園歌集 中島広足）

このように「はだれ」は歌人たちに好んで用いられていて、それも万葉集と同じ意味に使われているのが大部分である。「かも鳥のうは毛はだらにおける朝露」「はだれにならぬ敏鷹ぞなき」など、「まだらに」の意味と思われる歌もある。これらは詠者が「はだれ」の意味を明確に擲んでいたかどうか疑問である。それは平安末期頃の顯昭の袖中抄でも伺われる。

顯昭云 ほどろくは、はだらくにといへる詞也。ほ・は、と・た、ろ・ら同音也。（中畧）はだらは、ま

だらといふことば也。はとまと同じひゞき也。万葉云ほどろほどろとは、かきたれてふると云也。（中畧）

万葉云 夜之穂杼呂……これらもよのまだらと云うか。ひとへにあかくもならぬ心にや。（日本歌学大系別巻

二 袖中抄 才五）

「はだれ・ほどろ」が「まだら」と同意であるとする説では、管見に及んだものでは最も早いものようである。次で正徹日記にも

はだれは草木の葉のちとかたぶく程ふりたる雪也。或ひはまだらなる雪也。いづれにてもあれ、うすき雪の事なり。（正徹日記 下）

ハダレは葉垂の意という新見であるが、苦しい解釈のようである。マダラの意かともいい結局うすき雪に落着け

ている。正徹の頃にはこのことは既に意味の分らぬことばになつていたと思われる。下つて近世の服部土芳の三冊子には、

はだれ雪、かたびら雪、みな大ひら雪の事をいうと也（くろさうし）

とあり、雪の降る状態からして、はら／＼降る雪、即ち大きな雪片ボタン雪の類いと見ている。充分には説明していないが、「はだら はだれ ほどろ」の原義に近いものを捉えていると思う。「はだら はだれ ほどろ」は雪の降る状態、降り積つた状態をいう擬態語で、はら／＼と降る沫雪は、落花に見まがわれるばかり紛々と飛び、庭もはだらに降り敷き、消えやすく消え残つてもいる。蜻蛉日記の記述のように、「いたく荒るゝ事なくて」降る軽い雪と考えられる。それが中古末から「まだら」と混同が起り、「はだら雪」に「班雪」と漢字まであてると誤解が一そう固定化したものと考えられる。

## 六

それでは雪の降る形容の「保杼呂」と、「夜之穂杼呂」とは関係があるであろうか。前掲の沢潟博士の御説のように、「ほどろはやはりハダレ、ホドロに關係したものとと思われる……動詞成立以前の擬声語ともいふべきもの」と考えたい。ホの発音は一つであるから、保杼呂と穂杼呂は同じ。雪の薄太礼、保杼呂が降る状態の擬態語であるように、「夜之穂杼呂」も夜の状態を示す語であろうと考える。では夜のどのような状態を言うのかが問題となつてくる。

契沖一説 ほどはほのに通じ夜のほの暗きうち、即ち暁方。

宣長一説 はだれ、はなれに通じて夜の明けはなる頃。

古義 夜之分離（ハナレ）なり。夜の明なむとする極みを云なり

という説が基となつて、「明けようとする。暁方」という説が古註新註の主流をなしている。私は鴻巣氏の「物の不充分なことをいふ語のやうに思はれる」という御考えに賛同する。この全釈の解は充分に説かれていないの

で少し補足しよう。私は「夜之穂杼呂」を夜の暗い状態、分明でない状態、おぼつかない状態、時間的には暁方であつても、明けるのに程遠い暗さを言つていふと考へる。万葉集の三例 754 755 の歌からは、ほのほの明けようとする明るさは出て来ない。むしろ暗さを強調している。754 755 の歌は早暁の旅立ち、朝帰りを歌つているが、まだ暗いうちに、別れ難い早立ちをしたればこそ、吾妹子の物思わしげな面影が、鮮明に辺りの暗さの中に浮び上つて来るのである。1539 の歌は、「闇けくに、夜のほのほにも」とあつて、曉とも明方とも表現されていぬ。夜中であつても差支ないし、早朝の暁闇の中をわたる雁であつてもよい。明はなれるほの明るさをいつているのでなく、明けるに程遠い夜深さ、暗さを歌つていふのである。光明面を見ているのではなく、暗い心もとなき、不安さを感じられる。それ故に鳴き渡る雁がねの哀愁がひとしお深い感動を呼ぶのである。

もとに戻つて和泉式部日記の「夜のほのほ」を考えよう。「九月廿日あまりばかりの有明の月に御目さまして」とあるから真夜中を過ぎ曉にかかつていふわけである。侍の者の「そら耳をこそ聞きおはさうじて、夜のほのほにまどはかさるゝ」という口吻には、万葉集の三例と同じ気持があらわれている。夜のほのほの明ける感じでなく、明けるには間のある暗いうちからという気持で不平をいふのである。そして再び寝てしまつていふ。女はそのまゝ一睡もせず明したのである。

宇津保物語蔵開下の例を見よう。

「おきなかく、よのほのほにまゐりてただにやは。顯純啓せよ。宮の亮なれば、蔵人ならずとも」

備考 よのほのほ (延宝五年刊本) よのほの 岡本文庫本、萩野本、田中道麻呂校本)

右大臣源正頼が、娘である藤壺(あて宮)を迎えに来たが、東宮は退出を許さないのでむなしく待つていふ。「夜更けぬ」と催促してのち、上掲のことで正頼が不満を述べるのである。「翁(正頼自身をさす)が、夜の

ほどうろに参内して迎えているのに、手ぶらで帰られようか。顯純よ（正頼五男）東宮に藤壺退出のことを申し上げよ。御身は東宮の亮だから藏人でなくても参つて申し上げられるはずだ」と、心中穏やかならぬことばつきである。それから「夜中過ぐるまで立ち給ひて、曉にぞ大臣は帰り給ひける」とある。

和泉式部日記

有明の月に御目さまして

← 門をたたかせ給ふに

← 女前なる人を起こして問はせんとすれど

← たゞきやみぬ

← 下男「夜のほどうろにも……」

← （下男）また寝ぬ

← 女は寝で明かしつ

← 明かくなりぬれば（宮）の御文あり

宇津保物語と和泉式部日記とは、全く同様な時の経過を辿っている。「夜のほどうろに」は夜更け以後で、曉（夜

宇津保物語

大臣参り給へれば

← 今宵かく……

← 夜更けぬと消息申し

← 正頼「夜のほどうろに……」

← 夜中過るまで立ち給ひ

← 曉にぞ大臣帰り給ひける。

← つとめて大臣の御文あり



明け)以前ということになる。ほのぼの明けようとするよりは、もつと早く夜深い頃である。しかし深夜より曉に近いころの状態ということになる。それは万葉の三例も同じであろうと思うのである。「夜のほども」は五例という少い用例ながら、その語義、語感、用法は万葉集から、和泉式部日記に至る間少しも変化していない。その共通点を拾ってみると、

- (1) 発語者が男性である。
- (2) 日常語ないしは話語である。
- (3) 強調的表現に用いている。

(1)について述べると、万葉集の三例は、大伴家持が二例、聖武天皇が一例である。家持の二首は、詞書により坂上大嬢に家持が贈つたことが明かである。聖武天皇御製は作者を天皇と信じてよいか不明であるが、あるいは古歌を御製と伝えたかも知れないし、それほど個性的な歌ではないが、この歌の載せられている巻八は、整然とした巻で、作者名の明記された巻であり、聖武天皇は万葉集の選進の時期に近い末期であるので、先ず記載通り聖武天皇とみて置くのが妥当であろう。宇津保物語では、右大臣源正頼の詞であり、和泉式部日記でも、侍の男のことばである。五例とも全部男性によつて語られている。

(2)家持の歌では吾という一人称の表現をしているし、聖武天皇御製にしても、自らの詠歎をうたつて居り、宇津保物語と和泉式部日記では、地の文でなく對話の中に出ている。これは日常の話のことばであろう。正頼にしても侍の男にても、感情のあらわな無遠慮なことばつきであるから、雅語でなく日常の語として生きていたことばであろう。和名抄・名義抄・字類抄等の辞書に見えないことは、訓点語の系統でないものと思われる。現在では宇津保物語にも和泉式部日記にも、「ほどこに・ほどこに」という異本があるからといつて、この語の存在を否定することは出来ないと思う。この語が亡んで「夜のほども」が既に耳遠くなつた頃に、「ほどこに・ほどこに」などという本文の違いが生じたものではないかと考えられる。

(3) 逆接的に用いて強調する表現である。何らかの抵抗をのり越えてなすことを、「夜のほども」であることで強調している。夜のほどもの出立ちはつらく別れがたいものであるのを敢て出て来たために、吾妹子の面影が一層鮮明に目先にちらつき、愛恋の炎は胸を焼くようだと言え、夜のほどもの闇い空を鳴きわたるが故に、雁がねが冴えて感動的なのである。宇津保物語と和泉式部の用例は、当然やすむべき夜のほどもに出迎えに参つたり、起きて出て見たりして、しかも徒勞に終つたことへの不満を申し立てたのである。「夜のほども」には、夜の暗さ、はつきりしない不分明な状態、不安な気分が感じられる。そうしてこのことばは和泉式部日記の書かれた頃から後、話し言葉には用いられなくなり、記載されることも亡びてしまったものであると考えるのである。

(一九六五・九・五)